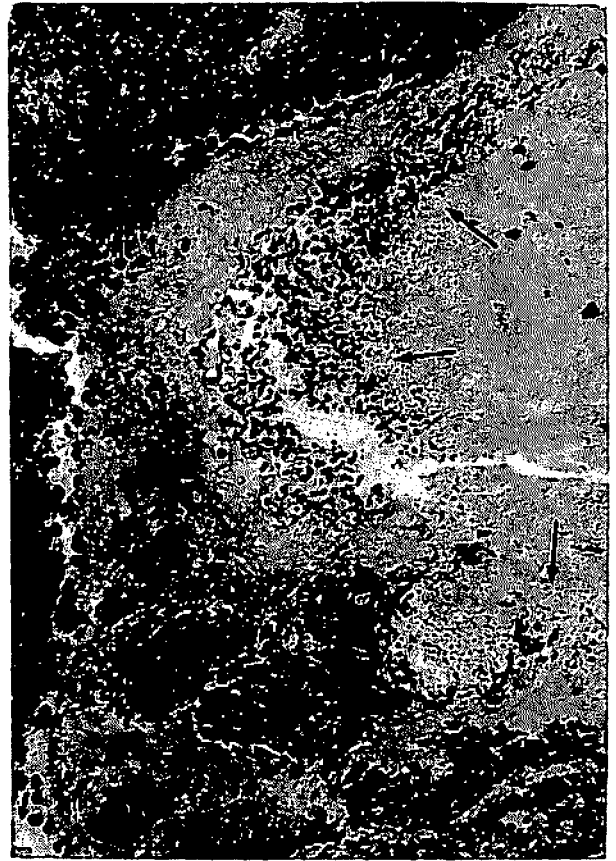
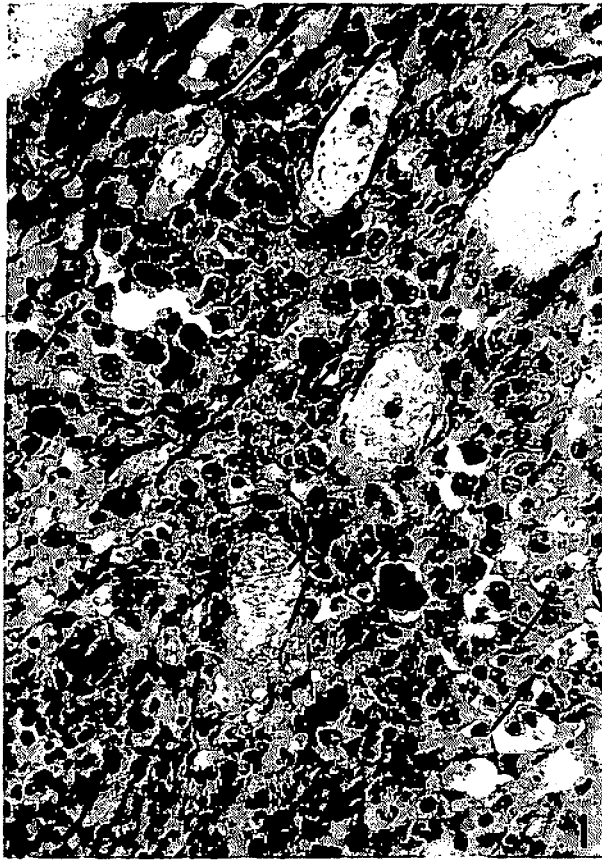


ヒストプラズマ病を疑う牛の腎炎

岩手大学農学部家畜病理学教室出題・第12回獣医病理学研修会標本 No.169



*Histoplasma capsulatum*によるヒストプラズマ病は、わが国では比較的耳新しく、とくに獣医学領域ではその報告は見当たらない。しかし、人獣共に感受性をもつこのカビは広く世界の土壤中に分布し、従って本病の発生もほぼ世界中にみられている。本菌は2相性を有し、非寄生時あるいは培地上では菌糸相を示し、動物体内ではCO₂に敏感であることから主として酵母相を示すことが知られている。家畜ではとくに犬に発生が多く、米國中東部での報告が多い。牛ではヒストプラズミンによる皮内反応陽性例がかなり高率に同地方において認められている。しかし、病巣を確認したものは本例を念めて4例にすぎない。

一般に、本病々変は組織球性細胞の小肉芽腫の形成と組織球胞体内における酵母相の菌体の寄生により特徴づけられ、犬では組織の壊死を示すことは少ない。また、他のカビ性肉芽腫巣にみられるような巨細胞反応を欠くことも知られており、組織学的診断は必ずしも困難でないといわれている。

本例は FALLOT 四徴(1. 拇指大の上位中隔欠損、

2. 大動脈騎乗、3. 肺動脈口の狭窄と左方転位、4. 右室壁の肥大と左室化)を示す心奇形がみられ、生前から強い全身の循環障害と血液濃縮所見が認められていた。剖検において、米粒大前後の乾酪化壊死病巣を脾、腎、心、脳および舌に認めたものである。

病巣は、中央部にエオジンに淡染する乾酪化物質および細胞性頽廢物をいれ、これを取り囲んで組織球性細胞の増殖がみられ、毛細血管も数を増している。組織球の胞体内には、ヘマトキシリンに淡染、PAS 強陽性、チオニンに異染性を示す1-5 μ 、大部分は2-4 μ の酵母相菌体(矢印)を多数確認することができる(図1, PAS染色, $\times 400$)。また腎病巣壊死組織の裂隙においては同様の菌体が多数集団をなして(矢印)認められる(図2, H&E染色, $\times 400$)。なお、肺組織では強い充出血と、菌糸相を主とし酵母相あるいは移行期の菌体を肺胞壁に一致して多数認めた。

本病の病理発生については、多くの興味ある問題が含まれるが、とくに牛では感染と病巣発現との間に複雑な問題があるようで、本例においても心奇形という生前の強い循環障害を無視することはできない。